

民話

— 東北文教大学民話研究センター —

発行 東北文教大学
民話研究センター

〒990-2316
山形市片谷地515
東北文教大学附属図書館
TEL 023-688-7544
メール library@t-bunkyo.ac.jp

保育の中のわらべうた

どんぐり保育室 施設長 濱口 敦子

わらべうたは、古くから学童期の子どもたちが中心となって、子どもから子どもへ遊び継がれてきた伝承文化です。幼児期の子どもたちは学童期の子どもたちに交じって遊びつつ「おみそ」「みそつかす」などの名まえをもらって、ルールをしつかり理解できていなくても許される、所謂特別枠での参加者として位置づけられ、大きな子どもたちにリードしてもらいながら遊んで自然と遊びを身につけていくことができました。ところが時代が変わり、今では地域で異年齢の子ども集団による遊びがなかなか成立せず、巷でわらべうた遊びを見かける機会が少なくなってきました。そのため、幼児期の子どもたちが大きな子どもたちからわらべうた遊びを伝えてもらえる機会もほとんどなくなってしまうかもしれません。しかし、そのような中でも、保育園などでは、地域の中にあつた子ども文化を「保育者から子どもへ」「子どもから子どもへ」という形に変え、子どもの遊びの中で伝承されてきたわらべうたを歌い遊び継いでいっています。

保育園では、子どもたちの成長段階によって順を追ってわらべうたに親しんでいます。まず乳児期には大人と子どもの一対一でのわらべうたを十分行い、信頼関係のある大人からの愛をしつかり受けながら何度も繰り返しわらべうたに親しみます。少し成長してくるにしたがって、仲間への意識が高まり、子どもたち同士の小集団によるわらべうた遊びが楽しめるようになります。四・五歳児になると、役交代などのルールが明確にある集団遊びとしてのわらべうた遊びを行えるようになります。

私はわらべうたを大事に育む保育園で保育士としての経験を積み、今は同法人の小規模保育所（一歳児六名、二歳児六名、計十二名の保育室）で保育にあたっています。乳児期の大事な時期に、わらべうたを通して子どもたちと通じ合えることに喜びをもって保育にあたる日々です。

「ゆすつて ゆすつて ゆすらんめ えべすさんに なれよ」というわらべうたがあります。今の時期、毎日歌っているわらべうたです。大人が子どもをおんぶしてリズムに合わせて軽く左右に揺らす遊びです。少し慣れてきた子は、横向きで負ぶい、左右に揺らすことも楽しめます。先日、一歳児担当の保育士が一人の子を横向きに負ぶい何度もこのわらべうたを歌っていました。一度終わって降ろした後も、その子が目を大きくしてうなずくように「もう一回やって」と言いたそうな表情を見ると、「もう一

回ね、おいで。」とまた負ぶって歌いました。私たちは、子どもが「もう一回」と言ってくる時には必ず繰り返し遊ぶことを心がけています。繰り返し遊ぶことで子どもの中にわらべうたが溶け込んでいくからです。また、子どもはこうした一対一の関わりの中で、自分の思いをいつでも表現してよいものなのだ、自分は大人にしっかりと受け入れられる存在なのだということを、認識していくことができるからです。特別な行為ではなく日常的な関わりの積み重ねこそが安心する気持ちを育むのだと日々のやりとりを通して感じます。

さて話を元に戻しますと、「ゆすつて ゆすつて」のわらべうたを何度か歌った頃、別の遊びをしていた子ども傍に来て様子を見始めました。負ぶわれていた子は、揺れながらも得意そうに満面の笑みで見ている子の方を見ました。そして歌が終わると、今度は、今までわらべうたの様子をずっと見ていた子が、次は私にもやってほしい、と言うように保育士の方に近づいて、両手を挙げました。保育士もそのことにすぐ気が付いて「見ていてくれてありがとう。〇〇ちゃんもやりたいのね。そしたら次は〇〇ちゃんの番ね。」と言い、同じように横向きに負ぶって歌い始めました。すると、その子も嬉しそうに今やってもらっていた子の方を見て笑いました。そして、順番に繰り返しわらべうた遊びを行いました。この時、自分の番が必ず来るということが、日頃からの積み重ねで分かっているので、安心して待っている姿が印象的でした。待っている子も嬉しそう、負ぶわれている子も嬉しそう、歌っている保育士も嬉しそう、三人から満たされた雰囲気伝わってきました。

二歳児くらいになると、このようなわらべうた遊びをするうちに、ぬいぐるみや人形を連れてきて、子ども自身がぬいぐるみや人形をおんぶしてわらべうたを歌い始める場面がよくあります。大人からやってもらったことを今度は自分もやってあげたいのは、その子自身が愛を受けて満たされているからこそできることです。大人に十分愛されて、愛でいっぱいになった子どもは、他の誰かを愛せるようになると思われますが、わらべうた遊びについても同じことが言えるのではないかと感じます。

私たちは長くても二年間しか保育室の子どもたちと過ごすことはできません。年少クラスからは幼児クラスがある保育園や幼稚園に転園するため、全員卒園となります。とても短い時間ですが、私たちは卒園する子どもたち全員誇りを持って送り出すことができます。それは、わらべうたを中心にして培った深い絆があり、しっかりと育まれた自己肯定感が新しい世界に歩み出す子どもたちを照らしてくれると信じているからです。これからも、そんな大きな気持ちを抱きながら、一回ずつのわらべうた遊びの時間を大事にしていきたいと思っています。